二〇二三（令和五）年度　研究所報告

1．二〇二三（令和五）年度構成員

□東アジア学術総合研究所構成員

所長　岩田　幸訓
兼担所員　陽明学研究センター長　牧角　悦子
同　日本漢学研究センター長　町　泉寿郎
同　国際政治経済学部教授　小具　龍史
同　国際政治経済学部専任講師　菊地　宏樹
客員研究員　石橋　賢太

□東アジア学術総合研究所運営委員会構成員

所長　岩田　幸訓
陽明学研究センター長　牧角　悦子
日本漢学研究センター長　町　泉寿郎
文学研究科長　山口　直孝
国際政治経済学研究科長・国際政治経済学部長　佐藤　晋
国際日本学研究科長　松本健太郎
文学部長　江藤　茂博
文学研究科選出委員　原　由来恵
国際政治経済学研究科選出委員　今井　悠人
国際日本学研究科選出委員　林　英一
文学部選出委員　田中　正樹
国際政治経済学部選出委員　古田　拓也

□東アジア学術総合研究所企画・編集委員会構成員

所長　岩田　幸訓
兼担所員　陽明学研究センター長　牧角　悦子
同　日本漢学研究センター長　町　泉寿郎
同　国際政治経済学部教授　小具　龍史
同　国際政治経済学部専任講師　菊地　宏樹
文学研究科選出委員　原　由来恵
国際政治経済学研究科選出委員　今井　悠人
国際日本学研究科選出委員　林　英一
文学部選出委員　田中　正樹
国際政治経済学部選出委員　古田　拓也

□陽明学研究センター構成員

センター長　文学部教授　牧角　悦子
センター員　文学部教授　田中　正樹
同　文学部専任講師　和久　希
同　国際政治経済学部専任講師　今井　悠人
同　文学部非常勤講師　中根　公雄
研究協力員　広島大学名誉教授　市來津由彦
同　東洋大学名誉教授　吉田　公平
同　活水女子大学名誉教授　荒木龍太郎
同　横浜市立大学教授　小幡　敏行
同　秀明大学専任講師　久米　晋平
助手　大森　幹太

□日本漢学研究センター構成員

センター長　文学部教授　町　泉寿郎
センター員　文学部教授　牧角　悦子
同　文学部教授　田中　正樹
同　文学部教授　五月女肇志
同　文学部教授　王　宝平
同　国際政治経済学部専任講師　今井　悠人
研究協力員　文学研究科非常勤講師　中村　聡
同　公益財団法人東洋文庫主幹研究員　會谷　佳光
同　大東文化大学准教授　上地　宏一
同　公益財団法人東洋文庫研究員　清水　信子
同　日本文化大学教授　川邉　雄大
同　二松学舎大学非常勤講師　武田　祐樹
同　（四月～七月）　亀田　一邦
助手　（八月～三月）　鈴置　拓也
大江　公太

2．東アジア学術総合研究所運営委員会

第一回
日　時　五月二四日（水）一二時三〇分
場　所　二〇二教室
議　題　①東アジア学術総合研究所　陽明学研究センター長・日本漢学研究センター長の選考について
②東アジア学術総合研究所・陽明学研究センター・日本漢学研究センター　二〇二三（令和五）年度特別事業費について
③東アジア学術総合研究所　構成員及び事業概要について
④陽明学研究センター　構成員及び事業概要について
⑤日本漢学研究センター　構成員及び事業概要について
⑥東アジア学術総合研究所　共同研究プロジェクトの継続について
⑦東アジア学術総合研究所　兼担所員（共同研究プロジェクト代表者）の学内公募について
⑧日本漢学研究センター　助手の学内公募について
⑨東アジア学術総合研究所・陽明学研究センター・日本漢学研究センター　紀要・雑誌の原稿募集について
⑩その他

第二回
日　時　七月六日（木）　ガルーン開催
議　題　①東アジア学術総合研究所　兼担所員（共同研究プロジェクト代表者）の選考について
②日本漢学研究センター　助手の選考について
③その他

第三回
日　時　一〇月四日（水）一二時三〇分
場　所　四〇一教室
議　題　①東アジア学術総合研究所　二〇二四（令和六）年度特別事業費予算申請について
②日本漢学研究センター　シンポジウム・漢学者記念館会議の開催について（一〇月二八日・本学）

③ 陽明学研究センター　学術シンポジウム（案）について
④ 東アジア学術総合研究所・陽明学研究センター・日本漢学研究センター　投稿論文の査読について
⑤ 東アジア学術総合研究所・陽明学研究センター・日本漢学研究センター　投稿論文査読料の改定について
⑥ その他

第四回
日　時　一二月一三日（水）　ガルーン開催
議　題　① 陽明学研究センター・日本漢学研究センター　二〇二四年度助手の学内公募について
② その他

第五回
日　時　二月二六日（月）　ガルーン開催
議　題　① 東アジア学術総合研究所　内部監査指摘事項改善結果報告書の提出について
② 東アジア学術総合研究所　『東アジア学術総合研究所集刊』第五四集について
③ その他

第六回
日　時　三月六日（水）　一一時三〇分
場　所　二〇二教室
議　題　① 東アジア学術総合研究所　陽明学研究センター長・日本漢学研究センター長の選考について
② 陽明学研究センター・日本漢学研究センター　助手の選考について
③ 東アジア学術総合研究所・陽明学研究センター・日本漢学研究センター　各種刊行物の刊行について
④ その他

3. 陽明学研究センター運営連絡会

第一回
日　時　五月一五日（月）　一五時
場　所　一一〇三会議室
議　題　① 構成員・事業概要について
② 宋明資料輪読会の実施について
③ 陽明学関係資料データベースの構築について
④ 『陽明学』第三四号の原稿募集について
⑤ シンポジウム・講演会について
⑥ その他

第二回
日　時　九月二七日（水）　ガルーン開催
議　題　① 二〇二四（令和六）年度特別事業費予算申請について
② 陽明学関係資料データベースについて
③ 『陽明学』第三四号の査読について
④ 学術シンポジウム案について
⑤ その他

第三回
日　時　二月二九日（木）　ガルーン開催
議　題　① 助手の選考について
② 『陽明学』第三四号について

③　その他

4．日本漢学研究センター運営連絡会

第一回
日　時　五月一八日（木）一二時三〇分
場　所　八〇七教室
議　題　①　構成員について
②　事業概要について
③　『日本漢文学研究』掲載論文の転載について
④　助手の学内公募について
⑤　『日本漢文学研究』第一九号の原稿募集について
⑥　その他

第二回
日　時　九月二八日（木）一二時三〇分
場　所　八〇六教室
議　題　①　二〇二四（令和六）年度特別事業費予算申請について
②　シンポジウム・漢学者記念館会議の開催について（一〇月二八日・本学）
③　『日本漢文学研究』第一九号の査読について
④　資料調査の実施について（一〇月三日・四日・鹿沼）
⑤　その他

第三回
日　時　二月一四日（水）　ガルーン開催
議　題　①　『日本漢文学研究』第一九号について
②　「雙松通訊」第三〇号について
③　掲載論文の転載について
④　漢文資料の補修について
⑤　漢文資料の購入について
⑥　成果報告書の刊行について
⑦　その他

5．日本漢学研究センター　公開講座の開講

演習講座
①講座名　古文書解読講座
講　師　文学部教授　町　泉寿郎
曜日等　火曜日　四時限
②講座名　筆談文献解読講座
講　師　文学部教授　王　宝平
曜日等　水曜日　三時限
③講座名　『天道溯原』解読
講　師　文学研究科非常勤講師　中村　聡
曜日等　木曜日　三時限

6．シンポジウムの開催

①日本漢学研究センター　シンポジウム・漢学者記念館会議
日　時　一〇月二八日（土）　九時三〇分～一六時五〇分
会　場　九段キャンパス三号館四階三〇四一教室・オンライン併用
テーマ　転換期における東アジア文化交流と漢学
総合司会　日本文化大学教授・日本漢学研究センター研究協力員　川邉　雄大
趣旨説明・展示解説

二松学舎大学教授・日本漢学研究センター長　町　泉寿郎
【午前の部】
講　演「兪樾の『東瀛詩選』は代編作か」
二松学舎大学教授・日本漢学研究センター員　王　宝平
講　演「日本の漢文脈との出会いと付き合い」
関西大学名誉教授　陶　徳民
報　告「黒木欽堂と長尾雨山　――二松学舎ゆかりの讃岐出身の二大漢学者」
英明高等学校教諭　田山　泰三
報　告「安井息軒による明治初期の日中学術交流」
宮崎市安井息軒記念館学芸員　青山　大介
漢学者記念館会議・大学資料展示室企画展見学
【午後の部】
報　告「日本に再上陸したキリスト教の特徴を考える」
二松学舎大学非常勤講師・
日本漢学研究センター研究協力員　中村　聡
発　表「一九二〇～三〇年代の大連詩壇における日中文人交流　――李文権を通して見る詩壇の変遷」
二松学舎大学大学院生　王　弘
発　表「服部宇之吉と『燕塵』」
二松学舎大学大学院生　張　付梅
発　表「南拝山と東洋医道会　――台湾における漢方存続運動への影響――」
二松学舎大学大学院生　山形　悠
総合討論・閉会

②陽明学研究センター　公開シンポジウム
日　時　一二月二日（土）　一三時～一七時二〇分
会　場　九段キャンパス一号館二階二〇一教室・オンライン併用
テーマ　水戸学と尊王攘夷
――近代日本の漢学と陽明学――
総合司会　二松学舎大学専任講師・陽明学研究センター員　和久　希
開会挨拶・趣旨説明
二松学舎大学教授・陽明学研究センター長　牧角　悦子
【第一部】報告
報　告「水戸徳川家の礼学――「後期水戸学」理解のために」
東京大学准教授　高山　大毅
報　告「儒教史の中における水戸学」
常磐大学准教授　松崎　哲之
報　告「「志士仁人」とはだれか　後期水戸学における尊王攘夷」
金城学院大学教授　桐原　健真
【第二部】総合討論
質疑応答・総合討論　司会　東京大学教授　小島　毅
総括・閉会挨拶
二松学舎大学教授・陽明学研究センター員　田中　正樹

7．東アジア学術総合研究所共同研究プロジェクト

共同研究①
研究代表者　文学部教授　町　泉寿郎
研究課題　二松学舎の「漢学・中国学」――学校制度のなかの「教育・研究」
研究期間　三年（本年度は三年目）
実施内容
本年度が本研究の最終年度となる。基礎的資料調査の継続としては、明治期に漢学塾二松学舎に学び中国大陸で長く中国語通訳として活動した清宮宗親（一八七六―一九三六）の子孫から新たに本学に寄贈

をうけた資料の調査研究を進めた。資料の内訳は、清末・民国初の中国人による作品を中心に書画類一四二点、清末から満州国時代の中国大陸における写真類二七点、その他（辞令・賞状・徽章・器物等）二八点であり、その目録化・資料翻刻を行った。清宮資料は、従来必ずしも研究蓄積の多くない二松学舎出身者の中国大陸での活動事例として意義があり、また二十世紀初頭の中国大陸において三島中洲と二松学舎が陽明学の教育研究によって認知されていたことを物語るものである。

また、二〇二二年度に収集した岡山県浅口市金光町の金光図書館および金光教教学研究所に所蔵する三島中洲・小野家関係資料に関する研究を進め、研究会において報告した。また岡山県の個人所有の山田方谷・三島中洲資料の閲覧調査を行い、中洲の向学の契機となった方谷十三歳の七律を見出して、地元新聞に報道された。

二松学舎における「漢学・中国学」に関する研究としては、渋沢栄一と三島中洲および近代実業家の『論語』解釈をめぐる問題、大正天皇と三島中洲の漢詩を媒介とした交流について研究を進め、それぞれその成果の一端を講演などによって発表した。

また、二〇二二年度末に井原市で実施したシンポジウムの成果をまとめて『備中の漢学教育―山田方谷・三島中洲・阪谷朗廬・渋沢栄一・興譲館―』（二松学舎史パンフレット第三号）として編集刊行した。同書の目次は次の通りである。

一部　備中の漢学者と漢学教育

一　（趣旨説明）興譲館と備中の漢学者　牧角　悦子

二　雌伏の「村学究」―阪谷朗廬と備中漢学世界　桐原　健真

三　備中の漢学者から考える漢学の今日的意義
―山田方谷・阪谷朗廬・三島中洲―　町　泉寿郎

四　明治初期興譲館の教育活動
―二代目館長坂田警軒と窪田次郎の関係から　江藤　茂博

二部　興譲館に関わった人物たち

五　興譲館に関わった人物―（その一）渋沢栄一　木村　昌人

六　興譲館に関わった人物―（その二）馬越恭平の足跡と活動―生い立ちから三井物産入社までを中心に　松本　和明

七　興譲館に関わった人物―（その三）泊園書院の人々　横山俊一郎

共同研究②

研究代表者　国際政治経済学部教授　小具　龍史

研究課題　新型コロナウイルス感染症（COVID-19）による消費者のライフスタイル変容を考慮した革新的な新製品・サービス開発手法に関する探索的研究　―FFE（Fuzzy Front End）段階における東アジア地域の国際比較によるアプローチ―

研究期間　二年（本年度は二年目）

実施内容

新型コロナウイルス感染症（以降「COVID-19」）により変容したライフスタイルの下、〝ウィズコロナ〟の考え方に基づいたCOVID-19との共存・共生を余儀なくされ、企業は消費者の態度や行動の変化に対応した新しい分類を実施する必要がある。これ

までの研究では、分類ごとに消費財に対する購買態度や行動が異なることが明らかになっている。

昨年度から推進してきた本研究では、こうしたCOVID-19の影響を考慮したライフスタイル分類の類型ごとに、新製品・サービスに対して求められるアイデアやコンセプトの相違の比較分析を進めている。最終的には、それぞれの相違点やこの結果から導かれるＦＦＥ段階での最適な新製品・サービス開発手法の検討・提言を目的としている。

最終年度である本年度終了時までには、世界的にライフスタイルが変容する潮流の中で、この傾向が我が国特有ないしは日本企業が多く進出している他の東アジア地域（韓国・台湾）も同様か否かという点について国際比較を行い、確認・検証を進める。

本年度の前半は、主に昨年度実施した先行研究について、個別研究の単位で詳細にレビューを行うための研究を実施した。本研究のテーマと関係するCOVID-19と消費者行動、ライフスタイル概念と消費者分類、新製品開発等の領野の文献に関する詳細レビューである。また同時に本年度の後半では、昨年度実施した我が国を対象とする国内調査に続いて、主要な東アジア地域（韓国・台湾）を対象とする海外調査を実施した。具体的には、国内調査と概ね同様の調査項目であるCOVID-19によるライフスタイル実態や製品・サービス選択への影響、購買行動実態等を把握するための定量調査である。なお本調査はインターネット調査であり、韓国・台湾共に二百二十サンプル規模の調査規模により実施した。

現在は収集されたデータを基に、様々な角度から多角的に分析を進めている。なお、本調査は日本・韓国・台湾による国際比較調査であるため、それぞれの国内における分析はもとより、当該国間の国別比較による分析を同時推進している。

本研究の成果は、これまで関連学会での発表や学術誌への投稿・掲載等を目標としてきた。本年度は、前半の詳細レビューに関する研究の成果として、九月に「A Review of R&D and Marketing Integration in NPD Using a Triangulation Approach with Quantitative Text Analysis.」という題目でABAS Conference 2023 Summer:Part2にて公表することができた。来年度は、この二年間の研究成果を広く公表するべく、学術書（二松学舎大学学術叢書）の刊行を行う予定である。

共同研究③

研究代表者　国際政治経済学部専任講師　菊地　宏樹

研究課題　現代経営学の立場から見た、江戸後期の商家経営および藩政改革についての研究

研究期間　三年（本年度は一年目）

実施内容

経済環境と経営環境の激変に晒された江戸時代の藩と商家は、その経営・運営において大きな課題に直面していた。そのような中で、多くの経営学的な挑戦がなされ、失敗と成功が積み重ねられてきた。そのような事例は記録や書物として残されており、多くの歴史家の興味を引くところとなっている。

例えば、商家経営に関しては、どのような組織とすべきか、従業員の取り扱いについてどのように注意すべきかなどについて記された書物が残っており、大変注意深く扱われていたことがわかる。それ

は従業員向けであったり、家訓をはじめとする経営者向け・創業家向けの取り決めであったりという形態を持つ。また、諸藩においては、商家以上に家の継承が重要であったこともあり、家訓や家督を譲る際に藩主の心得として次期藩主に伝承した文章が残されており、藩運営の大きな支柱となっていた。さらに、江戸時代中期以降は、いくつかの藩において行政改革と財政再建とを目的とする藩政改革の試みがなされた。多くの失敗事例もあるが、中でも特筆すべき成功事例がある。それは久保田藩（秋田）、米沢藩（山形）、松代藩（長野）、備中松山藩（岡山）などである。こういった改革の成功事例は現代の経営学の観点から見ても、示唆に富んでいる。

しかし、以上のような諸事例は文献学的調査や歴史学的調査は行われているものの、経営学の立場から取り扱われることはほとんどない。このような現状に鑑みて、現代の経営学的な視点から江戸時代の経営や藩運営について検証することを目的として本プロジェクトをスタートした。

右記のような研究背景・目的のなかで本年度においては庄内地域の藩・商家を対象とした調査を実施した。まず、山形県の庄内地域にて、旧庄内藩における藩政改革についての史料調査、および酒田における商家経営の資料調査を行った。具体的には、「鶴岡市郷土資料館」、「鶴岡市立中央図書館」、「旧風間家住宅」、「酒田市役所」、「庄内米歴史資料館」、「本間家旧本邸」、「山形県酒田海洋センター」「庄内米歴史資料館」「本間家旧本邸」、「本間美術館」「酒田市立中央図書館」「致道館」といった施設を訪問し、史料調査を行うのと同時に、文献の複写・調達を行った。

また、同時に藩政・商家経営を分析するのに有用な理論枠組みを整理するために先行研究の文献レビューを実施した。主に経営組織論分野の文献を対象にし、本研究において利用可能性があるものを整理している。さらに、先述した調査の中で調達した文献をもとに事例研究を構築し、これに整理した理論枠組みを適用することで、分析に耐えることを確認した。この分析の成果については、『東アジア学術総合研究所集刊』に研究ノートの形で公表する予定である。